

3. ヤコブの夢

まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。

・・・これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。

——創世記 28：16～17

前回はイサクに関する「聖書いろはカルタ」の文句を紹介したが、ヤコブについては確か「い」の手札の文句が「石の枕に、天の夢」だったと記憶している。「石を枕に」だったかもしれないが、カルタの初めの札だからというだけでなく、子供心にもヤコブが見た夢はそれなりに印象深いものがあったのだろう。何度ともなく聞かされてきた物語であり、長じるに及んで、この場面のヤコブに自分を重ね合わせてみることも少なくなかった。

ヤコブはイサクとリベカとの間に双子の弟として生まれた。胎内で子供たちが押し合ったとか、リベカが「二つの民があなたの腹の内に分かれ争っている。一つの民が他の民より強くなり、兄が弟に仕えるようになる」（創世記 25：22～23 参照）と述べられているのは創世記の所謂「^{いわゆる}原因物語」の一つであり、ヤコブこそがイスラエルであり、12 支族の祖であることを明らかにする意図があったのだろう。

出生から成人に至るまでの兄エサウとヤコブの確執、ことに家督争いが熾烈なものであったことを創世記は伝えている。ヤコブの名の由来を創世記 25：26 は、誕生の時、兄エサウの踵（^{かかと}アケブ）をつかんで出たのでと語っているが、27：36 ではエサウに「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（^{アークブ}アーカブ）欺いた」と言わせている。父のイサクは肉が好きだったので狩猟に秀でて獲物を持ち帰るエサウを愛し、母のリベカは家事を手伝い料理にも秀でていたヤコブを愛したと述べられている。両親の偏愛や溺愛、つまりは自己中心的な在り方が身内の間でさえ対立や分裂を生み、憎しみから殺意を生む事例は今日も少なくない。罪人としての人間の偽らざる姿と言うべきだろう。

創世記 27：27～34 には、成人したエサウがヤコブの^{かんげい}奸計に^{はま}嵌って、煮物を得る代わりに長子の権利を弟に譲ってしまった経緯が描かれている。ヤコブは恐らく早くから、それを自分のものにしたいと^{うかが}窺っていたに違いない。エサウにとっては、眼に見えない長子の権利よりも空腹を満たすことが切実な問題だった。しかし、ヤコブと交わした約束がヤコブと母リベカの奸計によって現実化した時に、彼はとんでもない間違いを犯したことに気が付くと同時に、父の祝福を^{だま}騙し取ったヤコブに激しい怒りと憎しみの炎を燃やし、父の死を待つて殺そうと^{はか}謀る。創世記 27 章にはその経緯がかなり詳しく述べられているが、弟に騙されて長子の権利を奪われた、その意味では被害者とも言えるエサ

ウに対して、聖書は「エサウは、長子の権利を軽んじた」（創世記 25：34）「みだらな者、俗悪な者」（ヘブライ人への手紙 12：16）と手厳しい。わたしが記憶している「聖書カルタ」には確か「羹（あつもの）一杯、世継ぎ売り」という文句があった。逆に、父の祝福を兄から騙し取ったヤコブは、イスラエルの名と共に神の祝福という大きな約束を得たのであった（創世記 35：1～14 参照）。長子の権利とは単に家督を継ぐというだけでなく、神の経綸^{けいりん}と祝福を嗣業^{しぎょう}として受け継ぎ、譲り渡していくべき務めを意味した。その点から考えると、ヤコブを単に強欲な人間と決めつけることは適切ではないだろう。ともあれ、ヤコブは他に換えられない宝と同時に務めを担うことになり、エサウはイスラエルの家系から離れて、エドム人の祖となったようだ。33 章には、この兄弟の再会と和解の場が丁寧に描かれている。これをどう読むべきか。

ともあれ、ここでは、兄の怒りと殺意を背中に感じながら伯父の家を目指すヤコブの、いわば逃避行とも言うべき旅の途上、彼が経験したことに思いを馳^はせてみたい。

母リベカの配慮で身を守ってくれる場所は定まっていたとしても、ヤコブの心中はどうだっただろうか。父の失望や兄の怒りが彼に不安や恐れを抱かせたことは想像に難くない。自分が為したことに對して、悔悟^{かいご}の念が全くなかったとは言えないだろう。しかし、どのように悔いよう^{もはや}と最早取り返しは効かない。切望してやまなかったものが手中にしたと同時に重圧となって自分に押し掛かってくるようなことは、ヤコブの場合と内容や次元は異なるとしても、わたしたちの間でも決して少なくはない。創世記はヤコブの後悔や苦悩については触れてはいないが、父や兄を失ってしまったとも言えるヤコブの心中はいかばかりだったことか。まさに「石もて追われるがごとき」^{しゅつたつ}出立であり、途中には荒れ野が待ち受けていた。隊商など群れをなしての旅であれば何とか凌^{しの}げるとしても、一人旅は極めて危うく困難であったに違いない。日が沈み、傍らにあった石を枕に横になったヤコブが心身ともに膠着^{こうちやく}した状態だったことは容易に想像できる。

彼はそこで夢を見た。天まで達する階段が地に向かって伸びていて、御使^{みつか}いたちがそれを上ったり下ったりしており、主が傍らに立って、彼とその子孫への祝福を約束しておられたのである。目が覚めた彼は、標記のように「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」と言って、恐れおののきながら「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、天の門だ」と語り、翌朝早く起きて、枕にしていた石を記念碑として立て、先端に油を注ぎ、その場所をベテル（神の家）と名付けたのであった。

この場面は教団讚美歌 320 番（新生讚美歌 603 番）にも描かれて、多くの人々に愛唱されている。ことにタイタニック号の沈没直前まで演奏されたという故事も絡んで、その美しい旋律と歌詞が人々の心を捉えていることは言うまでもない。讚美歌では「主よ、みもとに近づかん」が各節ごとに繰り返されている。主が近くにおられ招いておられるから、ということも歌詞の流れの中から十分に読み取れるし、荒れ野^{りゅうり}を流離しながらもなお、主の祝福を求めて止まなかったに違いないヤコブの心情も十分に推察できる。しかし、わたしは同時に、ヤコブが荒れ野で見た夢を通して、わたしたちが主に

近づく、と言うよりも、主が近づいて下さる、わたしたちが気付かない時にも主が傍らにいて見守り、支えていて下さることを強く思う。神の顔などを拝することなど到底できない罪人、欲望に駆られて平気で人を偽り陥れてしまうような人間をも決して見捨てず、傍らにいて守り、支え、祝福して下さる神を思う。詩編 139 編には「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも、あなたはそこにいまし、御手をもってわたしを導き、右の御手をもってわたしをとらえてくださる」と謳われている (7~10 節)。

「神共にいます (インマヌエル)」という祝福に勝るものがあるだろうか。イエス・キリストの降誕を祝うクリスマスから 1 月が経った。老シメオンは乳飲み子イエスを抱きかかえて、讚美して語った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」(ルカ 2:29~32)。

唐突な言い分かとも思うが、シメオンはヤコブの夢がイエス・キリストにおいて実現したと言外に語っているのではないか。同時に、彼の心境 (信仰告白) を自らの言葉として真実に言い表したいと願う昨今である。